

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長

## タマネギべと病の防除対策について

平成30年産タマネギにおいてべと病による被害を抑えるためには、平成29年産に引き続き栽培期間を通じた防除対策を徹底する必要があります。

については、下記の事項を参考とし、防除対策を実施してください。

### 記

#### 1. 今作の発病リスク

前作での被害の発生は大きくなかったが、発病は多くの圃場でみられた（中晩生露地栽培、5月上旬調査 発生圃場率：29年産 90.0%（平年よりやや多い）、平年 72.1%、発生株率：29年産 22.2%（平年並）、平年 18.8%）。そのため、土壌伝染である本病の伝染源は前年と同程度に残存し、発病リスクは依然として高いと考えられる。

#### 2. 防除対策（図 1 参照）

##### 1) 秋期（苗床）

苗床の土壌消毒を確実に実施し、育苗期に薬剤防除を行う。

##### 2) 本圃の準備

可能な限り、これまで本病の発生のない圃場を用いる。さらに、暗渠、明渠や高畝による排水対策を行うとともに丁寧に耕起し、べと病の発生しづらい環境作りを行う。なお、本圃の準備は時間に余裕をもち、適期に定植を行う。

##### 3) 12月～1月頃（定植後）【一次感染防止】

平成 29 年産では、秋季の長雨により定植が遅れたことから、定植作業等に追われ、定植後の防除の遅れや未実施により、十分な効果が得られず、越年罹病株が多発生した圃場もみられた。

本年産では、秋季に感染する越年罹病株の発生を抑えるため、定植後から計画的にジャストフィットフロアブルやザンプロDMフロアブルによる防除を実施する（図 1 参照）。

4) 1月上旬～3月頃【越年罹病株の抜き取り徹底】

平成29年産では、一部で抜き取りが不徹底な圃場が認められた（写真1）。そのような圃場において、春期に本病が多発生する傾向にあった。

越年罹病株の発生に注意し、発見した場合は、早めに残さず抜き取って圃場外へ持ち出し処分する（写真2）。

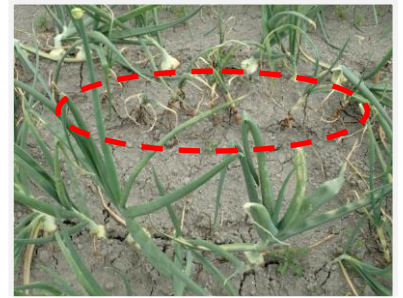


写真1 越年罹病株が散見された多発生圃場(平成29年5月)  
点線囲みは、越年罹病株

5) 2月下旬以降【予防散布の徹底】

平成29年産では、一部の圃場で散布間隔が開いたり、薬剤の選定に問題があり、十分な効果が得られず多発生した事例がみられた。

本病は、平均気温10℃以上で曇雨天が続く条件で孢子を形成し、周囲の株に伝染するので、2月下旬（二次伝染直前）から収穫まで、感染防止に重点を置き、マンゼブ剤を軸とした10日間隔の防除体系で切れ目のない防除を行う。特に、発生が増加しやすい球肥大初期以降は散布間隔を7日とし、防除をより徹底する（図1参照）。



写真2 越年罹病株

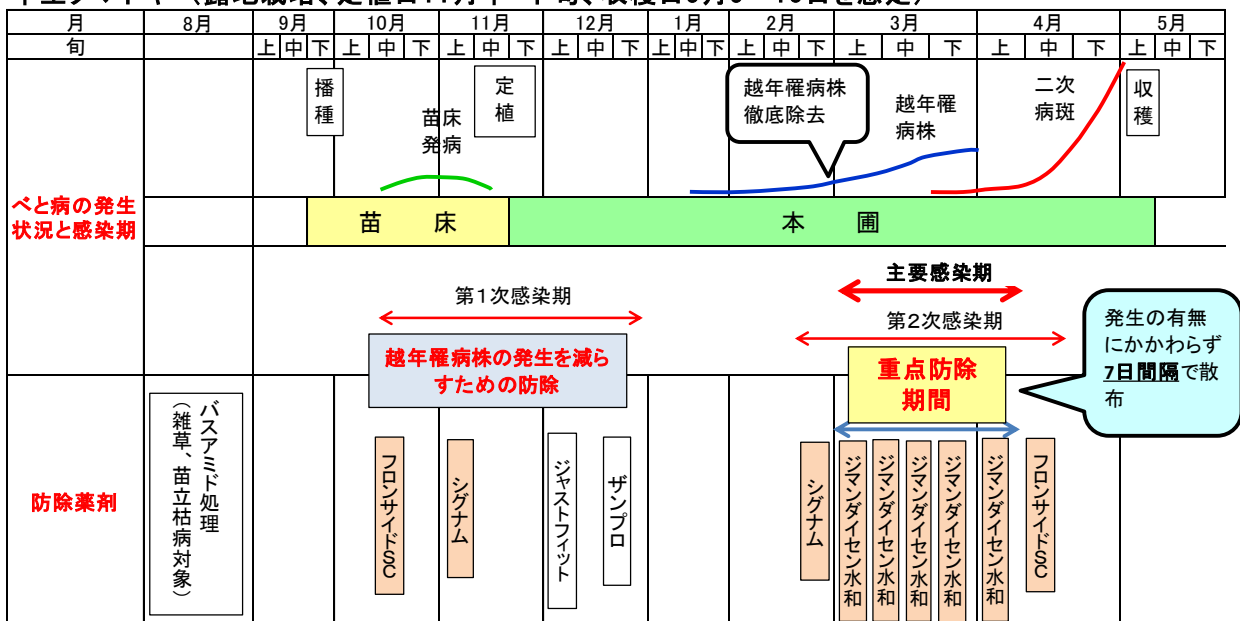
なお、気温15℃前後で曇雨天が続くと多発生しやすいので、このような場合は追加防除を実施する。

早生タマネギ等で早期に発生したべと病が、周辺の中晩生タマネギの感染源となる場合があるため、防除対策には地域全体で取り組む。

図1 タマネギべと病の発生と本病を主体とした防除体系(例)

**べと病は年内の感染防止が重要。春期の防除は予防散布を徹底**

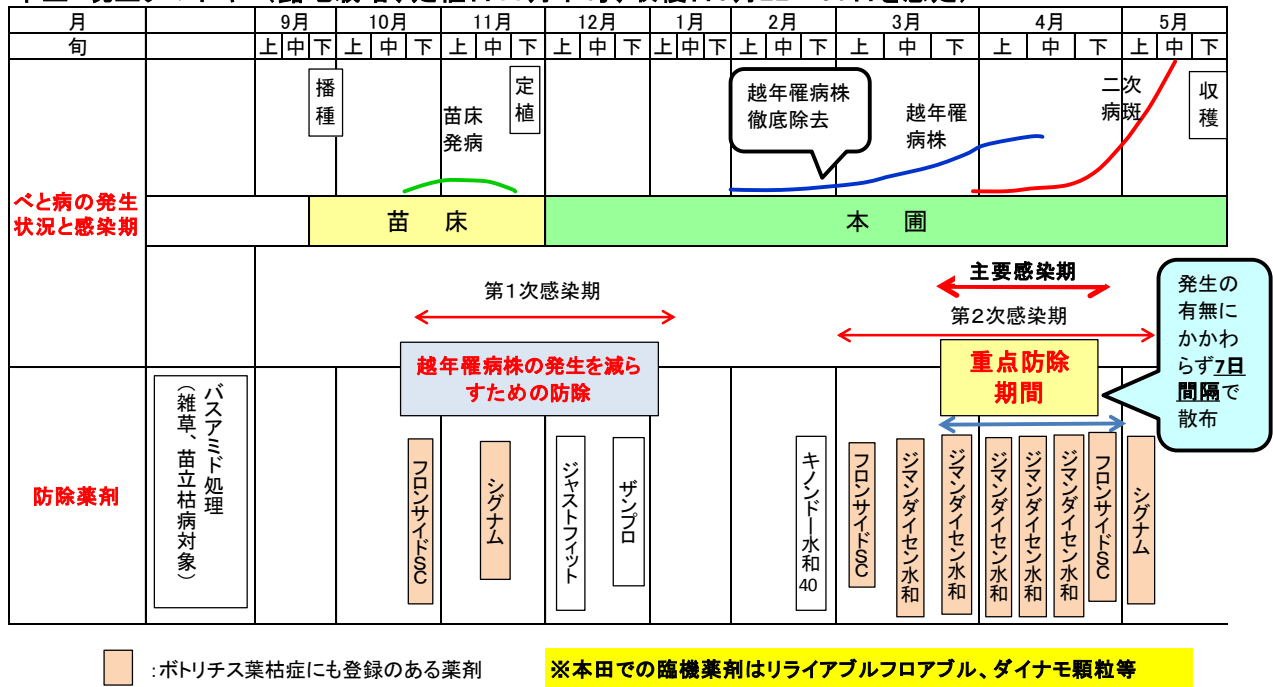
早生タマネギ（露地栽培、定植日11月中・下旬、収穫日5月5～10日を想定）



□ : ボトリチス葉枯症にも登録のある薬剤

※本田での臨機薬剤はリライアブルFL、ダイナモ顆粒等

中生・晩生タマネギ（露地栽培、定植日11月下旬、収穫日5月22～30日を想定）



※フロントサイドは、皮膚かぶれを生じることがあるので、かぶれやすい体質の方は使用しない。

※キノンドー水和剤40は、「タマネギ軟腐病」で登録あり。

※図1は防除体系例であり、実際の防除については各地区の防除暦等を参考に行う。

【参考データ】

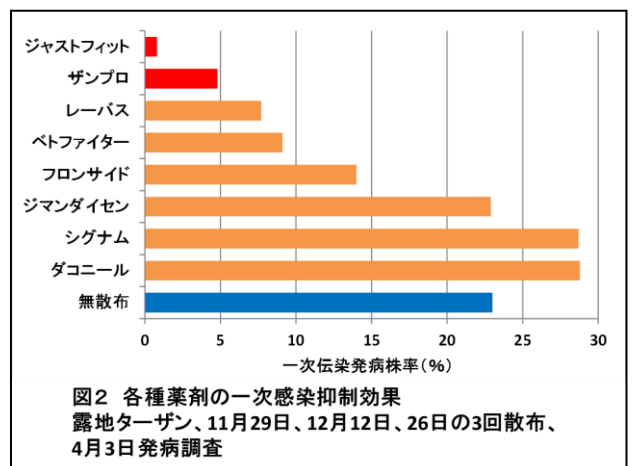
●第一次伝染の発生抑制に有効な薬剤の選抜（2017年、上場営農センター）

定植後の感染による越年罹病株の発生を抑制するため、本圃定植後の防除に有効な薬剤の選抜が行われた。

その結果、発病株率は「無散布区」で23.0%であったのに対し、ジャストフィットフロアブルが0.8%、ザンプロDMフロアブルが4.8%と、発生を低く抑えた。（図2参照）。

本圃定植後に、両剤の散布が越年罹病株の抑制に有効であることが示唆された。

この結果から、両剤を12月の防除薬剤に組み入れた。

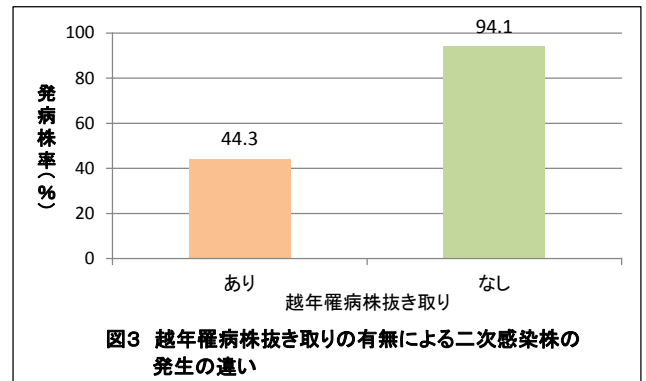


●**越年罹病株の抜き取りが二次感染株の発生に与える影響（2017年、上場営農センター）**

越年罹病株の抜き取りが、その後の発生に与える影響が試験された。

その結果、発病株率は「抜き取りなし区」で94.1%であったのに対し、「抜き取りあり区」は44.3%と、発生を低く抑えた。（図3参照）。

越年罹病株の抜き取りが、その後の発生抑制に有効であることが明らかになり、引き続き、抜き取りの徹底を推進する。



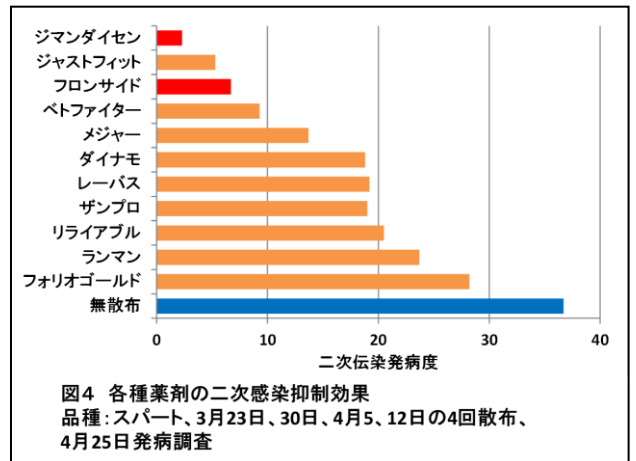
●**二次感染期に有効な薬剤の探索（2017年、農業試験研究センター）**

春期に本病の発生を抑制するため、二次感染期の防除で有効な薬剤の選抜が行われた。

その結果、発病度は「無散布区」で36.7であったのに対し、ジマンダイセン水和剤が2.3、フロンサイドSCが6.7と、発病度を低く抑えた。（図4参照）。

春期の二次感染期にこれら薬剤の散布が本病の発生抑制に有効であることが示唆された。

この結果から、春期の重点防除期間には、耐性菌リスクが低く、予防効果が高いジマンダイセンの連続散布としている。



連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部  
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088  
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085